

令和2年度 学生による地域活性化プログラム

石川英樹ゼミナール 活動報告書

栃尾地域のPRによる活性化:

空き家の再活用による地域振興活動と 二十村郷の錦鯉のPR活動



02

令和2年度

ごあいさつ



長岡大学 学長 村山 光博

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」は、3、4年次の専門ゼミナールに所属する学生グループが、地域の課題解決や魅力創出に向けた調査研究と具体的な取り組みを行うことにより、学生の職業人としての基礎的能力の向上と地域活性化への貢献を目指すプログラムです。本プログラムは、平成19（2007）年度の導入から現在まで十数年に渡り継続し、発展してきた本学の特徴的な教育プログラムの一つであるとも言えます。最近では、取り組みの中心である学生の諸活動を新聞やテレビ、ラジオ等のメディアでも取り上げていただく機会も多くなりました。また、これまで本プログラムの運営に多大なご協力をいただいていた地域連携アドバイザーをはじめ地域の多くの皆様から、各取り組みテーマへのお問い合わせや激励のお言葉をいただいております。長きにわたりこの取り組みを続けて来られたのは、ひとえに地域の皆様の暖かいご支援とご指導の賜物と、心より感謝申し上げます。

「地域活性化とは何か」という問いに対する明確な答えを述べることは難しいと思いますが、本プログラムでは、答えの無い様々な地域課題に対して、それらの課題の原因をどのように捉え、どのように行動を起こして対応して行くのかを学生が自ら体得することができます。本学を卒業後に地域社会の一員となる学生が、将来このような地域課題に対して日々取り組むことになると考えると、これらの体験は彼らにとって大変貴重なものとなることでしょう。

本プログラムでは、各ゼミナールで設定したテーマの下で学生グループが活動を進めて行くこととなりますが、時には学生同士のちょっとしたすれ違いや一緒に活動する地域の大人たちとの意見の食い違い等が起きることもあります。このような体験も学生がさらに一歩、人として成長するためのきっかけとなります。ゼミで決めたテーマをまとめ上げるために、どのように他者とかわりながら取り組みを進めて行くべきなのか、この取り組みの中で自分の役割は何であるのか、などを考えながら活動を行っていくことで、チームで活動することの難しさだけでなく、チームで目標に向かって何かをやり遂げることの充実感や達成感を味わうことができます。

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」では、学生が地域に飛び込んで地域の皆様と一緒に汗をかき、考え、そして楽しむ中から、目先の地域貢献活動だけでなく、将来にわたって地域の活性化を担っていく事のできる人材の育成を目指しております。本学の建学の精神は、「幅広い職業人としての人づくりと実学実践教育の推進」と「地域社会に貢献し得る人材の育成」です。本プログラムは、まさにこの精神を実現するための中核となる教育プログラムであると言えます。

令和3年3月



長岡大学は、文部科学大臣の認証を受けた『公益財団法人日本高等教育評価機構』により、平成28年度大学機関別認証評価を受審し、平成29年3月7日、日本高等教育評価機構が定める大学評価基準を満たしていると「認定」されました。

はじめに

栃尾地域のPRによる活性化 ～空き家の再活用による地域振興活動と 二十村郷の錦鯉のPR活動～



長岡大学教授／ゼミ担当教員 石川 英樹

本報告書は、令和3（2020）年度石川ゼミナールⅢ・Ⅳにおける、「空き家活用班」7名（4年生4名、3年生3名）による活動記録である。本ゼミナールでは、昨年度から栃尾地区活性化をテーマに掲げて活動を開始したが、今から振り返ると、昨年度は3年生のみによるゼミとして初年度の取り組みだったことから、本年度の活動の準備段階の一年だったように思われる。その土台のもと、本年はある程度の地域貢献への寄与を実現できたと感じている。

本年度は3班に分かれて各テーマに取り組むことになったが、本報告書の「空き家活用班」の活動には、他の2つの班とは異なる特徴があった。他の班の活動は昨年度から引き続いて栃尾高校との高大連携体制で進められたが、本班にはそれがなかった点である。地域内の高大連携は、地域人材育成体制へ寄与する点でそれ自身が地域貢献である。それが無い分、この空き家活用班には地域活性化に対する結果が一層求められたと言えよう。

この班の取り組み課題の柱は、年度初めの当初段階から、（1）空き家改修作業への参加、（2）改修された空き家を使ったにぎわい創出のソフト事業の企画と運営、の二つに漠然と決まっていた。

そのうち（1）については、ゼミ生の取り組み内容を具体的に考えることが容易だった。改修予定の空き家とその基本的な企画・デザインが決まっていたからである。アドバイザーが地域おこしに向けて昨年度から企画し準備を進めておられた空き家があり、その改修作業をゼミ生がサポートすることで達成できるテーマだった。

他方で、（2）については方向性が全く定まっておらず、序盤は迷走した。しかしそうした中でも、ゼミ内の話合いでミニ・アクアリウム開催のアイデアが出て、その実現に向けて全員でラストスパートをかけることができたことは大変評価すべきだと思う。

さらに、その企画実現に向けて長岡錦鯉養殖組合様から錦鯉を提供いただき、結果として養鯉産業という長岡の地域産業振興の取り組みにもなった。長岡市のご担当者からは「『ALL 長岡』的な取り組みとして頑張っただけ」とエールを送っていただいた。地域間連携の下で実現されたこのミニ・アクアリウム事業は、当初予期していなかった活動だが、実現できたことで私自身、学生とともに大きな達成感を抱いている。

しかし、今年度の本班の活動は決してスムーズに進まなかった、ゼミ生が苦勞した点は多く、その詳細について本報告書をお読みいただくと幸いである。そこでの学生の対応は社会人基礎力の醸成に大いにつながったと思われる。そうして、地域の方々の多大なる教育力をお借りできた点に、担当教員として感謝の意を表したい。

令和3年3月

石川英樹
ゼミナール
(空き家班)

栃尾地域のPRによる活性化

～空き家の再活用による地域振興活動と二十村郷の錦鯉PR活動～

【参加学生】 7名(4年生4名, 3年生3名)

【アドバイザー】

4年生 旭 和馬、駒形昌亮、竹内寛織、温 嘉楠 デザイン事務所オオタケコウスケ 大竹幸輔 氏
3年生 小泉日和、竹内 葵、永田藍美

目標： 栃尾地区の交流人口の増加

◆空き家改修・ギャラリー創設への参加

◆ギャラリー活用によるにぎわいづくりのソフト事業を企画・実施

《プロジェクト①》

雁木通りのブランディングの拠点づくり
空き家改修プロジェクトへの参加
(ギャラリー創設)



ギャラリー「白昼堂々」完成



白昼堂堂オープンを伝える新潟日報朝刊 (2020/9/18) 記事

プラス 長岡養鯉業の振興
「二十村郷の錦鯉」PR

長岡錦鯉養殖組合と協働
(二十村郷の錦鯉 50尾提供)



長岡市内小学校
(浦瀬小、石坂小、
岡南小)水槽提供

《プロジェクト②》

ギャラリー白昼堂々(2020/12/6～9)
錦鯉ミニ・アクアリウム開催



トチオノアカリ協議会との協働

栃尾地域の PR による活性化：
空き家の再活用による地域振興活動と二十村郷の錦鯉の PR 活動

石川ゼミナールⅢ・Ⅳ（空き家活用班）

- 17K002 旭 和馬（リーダー）
- 17K078 竹内 寛織（副リーダー）
- 17K054 駒形 昌亮
- 17K306 温 嘉楠
- 18K039 小泉 日和
- 18K070 竹内 葵
- 18K086 永田 藍美

令和 3（2021）年 2 月

目 次

1. 石川ゼミナール空き家班の概要	1
2. 空き家活用事業の構想について	1
2.1 空き家改修・改修プロジェクトの基本構想	1
2.2 空き家の現地視察	3
3. 空き家改修への参画	5
3.1 作業完成のイメージ確認と作業日程の調整	5
3.2 天井作業・壁面作業	6
3.3 空き家改修の完了	8
4. ソフト事業案の検討	9
4.1 空き家活用のソフト授業に向けたアイデア出し	9
4.2 空き家カフェのアイデア検討	9
4.3 発想の転換	10
5. ミニ・アクアリウム開催への挑戦	12
5.1 ミニ・アクアリウム実施の方針決定	12
5.2 ミニ・アクアリウム実施のねらい～栃尾と域外交流による地域活性化	13
5.3 錦鯉についての学び～ヒアリング準備	13
5.4 長岡市錦鯉養殖組合様と長岡市錦鯉ブランド戦略室様へのヒアリング	15
5.5 錦鯉提供の相談	16
5.6 ミニ・アクアリウム実現に向けた企画の詰めと準備作業の開始	17
6. アクアリウムの会場準備	23
6.1 会場整備の作業	23
6.2 トチオノアカリ協議会との協働	26
6.3 錦鯉の到着	27
7. ミニ・アクアリウムの開催	29
7.1 成果発表会と会場最終確認の同時進行	29
7.2 イベント日程と担当者	30
7.3 イベントの4日間を通して	30
7.4 ミニ・アクアリウムの課題	30
8. 今年度の活動の振り返り	32
8.1 新たな取り組みテーマ・コロナで出遅れた序盤	32
8.2 取り組みの推進～その1：空き家リノベーション	33
8.3 取り組みの推進～その2：ミニ・アクアリウムの開催	33
8.4 今年度の全般的な反省	34
8.5 次年度に向けて	36
8.6 おわりに	36

1. 石川ゼミナール空き家班の概要

われわれ石川ゼミの空き家活用班7名（4年生4名、3年生3名）は、ゼミ全体の「栃尾地区活性化」への貢献という総論のもとで、現在空き家となっている雁木通りに面した特定の家屋の再活用プロジェクトにおける活動に取り組んだ。アドバイザーの大竹幸輔様のご指導の下で今年度発足した活動で、昨年度の栃尾高校との協働事業としてのツアー班と商品開発班の事業とは全く異なる取り組みである。ノウハウをはじめ、既存の蓄積が何一つない状態から活動を始めることとなった。

本事業のきっかけは、アドバイザー大竹様からの働きかけだった。昨年度の成果発表会後の打ち上げの際に、大竹様から空き家活用の話をうかがった。既に栃尾の具体的な空き家再活用への取り組みを始めたところであり、その事業では地域に人を呼び込む拠点づくりを構想しているというお話だった。その実現をサポートするために、私たち空き家班の活動が発足したのである。

まだ春休み中の2020年3月に、大竹様から空き家に関するそれまでの状況などについて話をうかがった。さらに、5月のZOOMによる授業では、空き家活動の推進役を担われている長岡市地域おこし協力隊員の加治聖哉様と大竹様を講師に招へいして、プロジェクトの検討を開始した。空き家プロジェクトの企画・検討の段階から、正式なゼミナールの活動として参画させていただくことが決定した。

2. 空き家活用事業の構想について

2.1 空き家改修・改修プロジェクトの基本構想

3月のアドバイザー大竹様との打ち合わせの際に、本プロジェクトについてこれまでの経緯とともに、事業の全体像について詳細なお話をうかがった。対象となる空き家は谷内通りの一軒家であり、リノベーションのための所有権移転等の手続きは完了されていた。そこは、それまでも1階部分が商店街の様々なイベントにおいてバザーなどに活用されてきた場所であるとの話もお聞きした。

その1階部分を加治様を中心とする作業により全面的にリノベーションし、ギャラリーとして活用するという方向性が定められていた。既に電気配線等の作業だけは完了しており、それ以外はこれから自分たちで進めるとのことだった。

さらに、重要なご説明として、この空き家改修は単に一つの空き家空間をギャラリーに変えるというスポット的な取り組みではないとのことだった。同ギャラリー空間が栃尾の立ち寄り場の1つとしてまちなか回遊の促進に寄与し、さらにはアートのまち栃尾というイメージづくりにつながり、様々な文化融合を促進し、究極には若者が住みたいまち作りの拠点にしたいという拡がりのある構想のもとでの空き家改修だった。

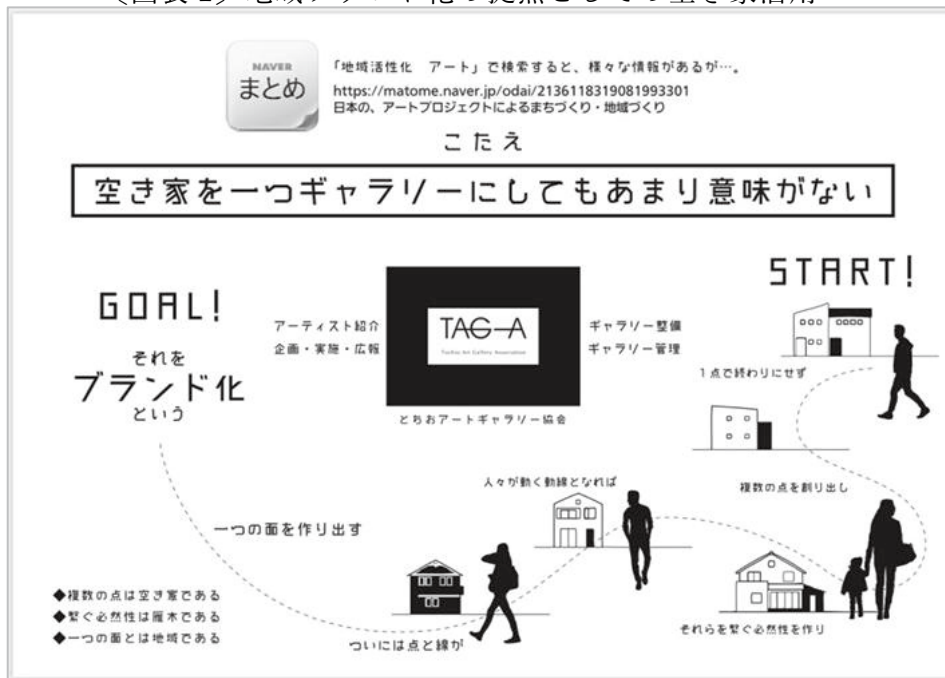
栃尾の雁木通りは総延長全国三位である。その雁木通りの中心に当該空き家は面していることから、雁木通り一帯の風化を阻止し観光資源として維持したいという狙いもある。ギャラリー空間でのソフト事業などによって、同地区の他の空き家について購買・転入促進につなげていきたいというお話もされた。まさに地域のブランド創出事業の一環としての取り組みなのである。（〔図表1〕〔図表2〕を参照）

〔図表1〕 谷内通り空き家改修プロジェクトのコンセプト



(資料) アドバイザー大竹幸輔様作成資料より

〔図表2〕 地域ブランド化の拠点としての空き家活用



(資料) アドバイザー大竹幸輔様作成資料より

以上のお話をもとに、私たちがゼミ活動として本事業に参画する方向性を確認した。以下の2本柱である。

- ①ハード事業としての空き家改修作業への参加
- ②改修完了後に、その空間で行うソフト事業の企画と運営

私たちのグループは、6月から12月までの半年間で以上の2テーマに取り組むことに

なったのである。参考として、今年度の私たちの授業時間以外で実施したフィールドワーク実績を下の表に示した。

〔図表3〕今年度の授業時間外におけるフィールドワーク実績

NO	日付	フィールドワークの場所・目的	出張活動者
1	令和2年3月26日	栃尾葡萄の杜でアドバイザー大竹様との打合せ	旭、竹内寛織
2	令和2年5月24日	谷内通り空き家の視察	旭、小泉、永田
3	令和2年6月29日	谷内通り空き家改修作業	旭、永田
4	令和2年6月30日	谷内通り空き家改修作業	旭
5	令和2年7月1日	谷内通り空き家改修作業	駒形、竹内寛織
6	令和2年7月3日	谷内通り空き家改修作業	永田
7	令和2年7月5日	谷内通り空き家改修作業	小泉
8	令和2年7月6日	谷内通り空き家改修作業	旭
9	令和2年7月7日	谷内通り空き家改修作業	旭
10	令和2年7月10日	谷内通り空き家改修作業	温
11	令和2年7月13日	谷内通り空き家改修作業	旭
12	令和2年7月14日	谷内通り空き家改修作業	小泉、永田
13	令和2年7月15日	谷内通り空き家改修作業	竹内寛織
14	令和2年7月31日	谷内通り空き家改修作業	駒形、竹内寛織
15	令和2年9月8日	アドバイザー大竹様オフィスでの打合せ	小泉
16	令和2年10月16日	長岡市錦鯉養殖組合でのヒアリング	駒形、竹内寛織
17	令和2年10月27日	浦瀬小学校、石坂小学校、岡南小学校で水槽借用	竹内寛織
18	令和2年11月10日	浦瀬小学校でポンプ借用	竹内寛織
19	令和2年12月1日(午前・ゼミ授業前)	白昼堂堂でのアクアリウム準備	旭、駒形、竹内寛織、温、小泉、永田
20	令和2年12月1日(午後・ゼミ授業後)	白昼堂堂でのアクアリウム準備	旭、駒形、竹内寛織、温、小泉、永田
21	令和2年12月2日	白昼堂堂でのアクアリウム準備	旭、小泉、永田
22	令和2年12月3日	白昼堂堂でのアクアリウム準備	旭、駒形、竹内寛織
23	令和2年12月4日	白昼堂堂でのアクアリウム準備	旭
24	令和2年12月5日	白昼堂堂でのアクアリウム準備・成果発表中継	小泉、永田
25	令和2年12月6日	白昼堂堂でのアクアリウム開催担当	駒形、竹内寛織
26	令和2年12月7日	白昼堂堂でのアクアリウム開催担当	旭、温
27	令和2年12月8日	白昼堂堂でのアクアリウム開催担当	小泉、永田
28	令和2年12月9日	白昼堂堂でのアクアリウム開催担当	旭、駒形、竹内寛織
29	令和2年12月10日	白昼堂堂でのアクアリウム撤収作業	旭、駒形、竹内寛織、温、小泉、永田
30	令和2年12月15日	石坂小学校、岡南小学校で水槽返却	駒形、永田
31	令和2年12月22日	浦瀬小学校で水槽返却	竹内寛織

2.2 空き家の現地視察

こうして活動方針が決定したところで、本格的なリノベーション開始前に、当該空き家を訪問して現場を確認することにした。しかし、4月～5月は新型コロナウイルス感染拡大により、春休み時点で考えていたグループ全体での活動が不可能だった。そのため、5月にまずは代表として三人のゼミ生が当該空き家とその周辺を散策するなど、事前調査を行った。

〔図表 4〕 改修対象の空き家が面する雁木の谷内通り
(路上駐車の軽自動車の向かいのシャッターの家屋)



〔図表 5〕 本プロジェクトの対象の空き家



〔図表 6〕 空き家二階部分



〔図表 7〕 リノベーション開始直後の空き家ギャラリーの 1 階部分



(執筆担当) 旭 和馬

3. 空き家改修への参画

3.1 作業完成のイメージ確認と作業日程の調整

われわれ空き家班メンバーは、ゼミ授業時間外に空き家の改装工事の補助に取り組んだ。後述の通り、空き家活用のソフト事業の企画考案と同時平行での活動となった。

まず、回収作業の完成イメージを確認した。そのためにアドバイザー大竹様から CG による空き家ギャラリーの完成イメージ図を提示いただいた。〔図表 8〕はその 1 つである。

〔図表 8〕 ギャラリー完成イメージ CG (大竹様作成)



このイメージ実現に向けた作業のために、大竹様および地域おこし協力隊員の加治様がスケジュール案を組んでくださった (〔図表 9〕〔図表 10〕参照)。それを元にわれわれゼミ生は各自が日程を調整して、都合のつく日に作業に加わった。

空き家の内装のリノベーション工事は6月下旬に本格的に開始された。現場で指導くださる加治様のもとで、参加人数がある程度分散し、日々2～3人で参加できるように意識した。

開始当初は、作業要領がわからず私たちだけでは貢献度合いが高くはなかった。しかし、加治様のご指導により、ある程度自分たちでも作業が進められるようになっていった。

〔図表 9〕 6月の作業予定

6 June 2020 (令和 2年)						
Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
31 祝日	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10 入居	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21 祝日 夏休	22	23	24	25	26	27
28	29 天井作業 9:00~17:00	30 天井作業 14:30~16:00	1	2	3	4

〔図表 10〕 7月の作業予定

7 July 2020 (令和 2年)						
Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
28	29	30	1 天井作業 9:00~17:00	2 天井作業 9:00~17:00	3 天井作業 9:00~17:00	4
5 壁面作業 9:00~17:00	6 壁面作業 9:00~17:00	7 壁面作業 9:00~17:00	8	9	10 壁面作業 9:00~17:00	11 壁面作業 9:00~17:00
12 壁面作業 9:00~17:00	13 壁面作業 9:00~17:00	14 壁面作業 9:00~17:00	15 塗装作業 9:00~17:00	16 塗装作業 9:00~17:00	17 塗装作業 9:00~17:00	18 壁作業 9:00~17:00
19	20	21 壁作業 9:00~17:00	22 シンク 取作業 9:00~17:00	23 シンク 取作業 9:00~17:00	24 水廻りの日	25 シンク 水廻り 9:00~17:00
26 カウンター 9:00~17:00	27 調整作業 9:00~17:00	28 調整作業 9:00~17:00	29 調整作業 9:00~17:00	30 調整作業 9:00~17:00	31 調整作業 9:00~17:00	1

3.2 天井作業・壁面作業

具体的なリノベーション作業は天井作業から始まった。まず古い天井を剥ぎ、その後に新たな石膏板を貼り付ける。貼り付ける板の大きさの調整、貼り付ける際に板を下から支える作業などが中心だったが、特に天板を下から支える作業はなかなかの重労働だった。

これらの作業をゼミ生が交代で数日間行った。その成果により、骨組むき出しの状態だった天井に板を貼り終えることができた。その後、天井の鉄骨の汚れを拭き取ってペンキを塗る作業が行われた。

天井作業に続いて、壁面へのボード貼り付けを進めた。ゼミ生の参加により、比較的効率よく工程が進んだ。古くなった壁紙をはぎ取り、支柱の位置を探るために電動ドライバーを使いねじを埋め込み、その後新しい壁板を貼り付けた。

〔図表 11〕 資材搬入後



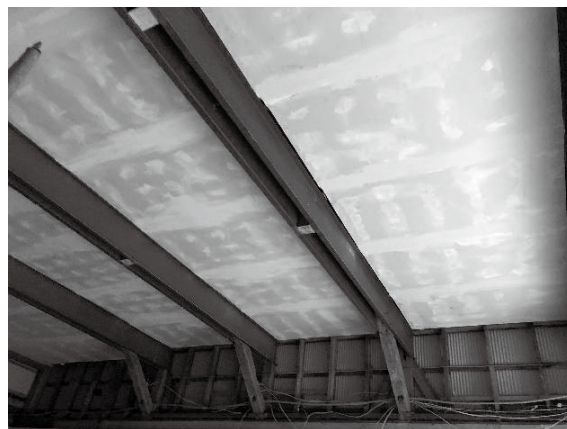
〔図表 12〕 天井の板貼り付けの準備作業



〔図表 13〕 天井の板貼り付けの調整



〔図表 14〕 天井の板貼り付け完成



壁面の貼り付け完成後の7月31日には、壁板にペンキで色を塗る作業が始まった。この作業にはわれわれ石川ゼミの学生だけではなく、加治様の後輩である長岡造形大学の学生も臨時で加わり作業が進められた。

この日はNST様に取材していただいた。このテレビ局の取材を等して、空き家問題や中山間地域での地域活性化に対するメディアの関心・期待の強さをあらためて感じた。NSTのご担当者は作業風景の撮影に加えて、ゼミ生をインタビューしてくださった。私たちは、取り組みの感想や空き家活用事業についての自分たちの考えを伝えることができた。

〔図表 15〕 NST の取材を受ける中での壁面ペンキ塗り作業



〔図表 16〕 NST 取材時の様子（その 2）



〔図表 17〕 NST 取材時の様子（その 3）



3.3 空き家改修の完了

9月12日に空き家改修が終わり、完成したギャラリーがお披露目された。ギャラリーは「白昼堂堂」と名付けられ、長岡市地域振興戦略部の広報チラシや新潟日報の記事でも取り上げられた（〔図 18〕参照）。この日にも再度NSTが取材に来られ、その様子が先のペンキ塗り作業の取材内容とあわせて10月6日に地上波でテレビ放映された。

同日、白昼堂堂ではこけら落としの個展として、アーティストでもある加治様が制作された廃材活用の動物型オブジェの作品が複数展示された。その個展は9月27日まで行われ、多くの地域住民がギャラリーを訪れた。

完成した白昼堂堂は広さ約20坪（66m²）、壁・天井が白で統一されたシンプルなデザインで、アート作品のイメージを害することなく柔軟にアレンジしやすい空間となった。加治様の個展終了後も大竹様、加治様の管理の下で、低価格なレンタル・ギャラリースペースとして運用される。既にアーティストによる個展が複数開催されており、地域住民やアーティストのファンがギャラリーに足を運んでいる。地域ブランドづくりのための拠点の空間が始動し、私たちのゼミ活動も1つの区切りを迎えることができた。

〔図表 18〕 白昼堂堂のオープニング伝える新潟日報朝刊（2020/9/18）記事



（執筆担当）永田 藍美

4. ソフト事業案の検討

4.1 空き家活用のソフト授業に向けたアイデア出し

空き家ギャラリーの改修工事への参加と並行して、6月以降大学でのゼミ授業再開に合わせて、この空間を活用した地域活性化に寄与するソフト事業案の検討を開始した。

空き家ギャラリーの完成イメージを意識しながら、人を呼び込むことができなかつ持続的な事業として進められる活用法を考え出すことがポイントだった。ギャラリー空間は汎用性が高く設計されていることから、インテリア面では様々なアレンジが可能である。古代ギリシャ風、中華風、レトロ風などの演出をイメージして、過去の空き家を活用した活用事例を報告し合い、自由に意見を出し合った。

4.2 空き家カフェのアイデア検討

最初に検討されたのはカフェ運営案である。

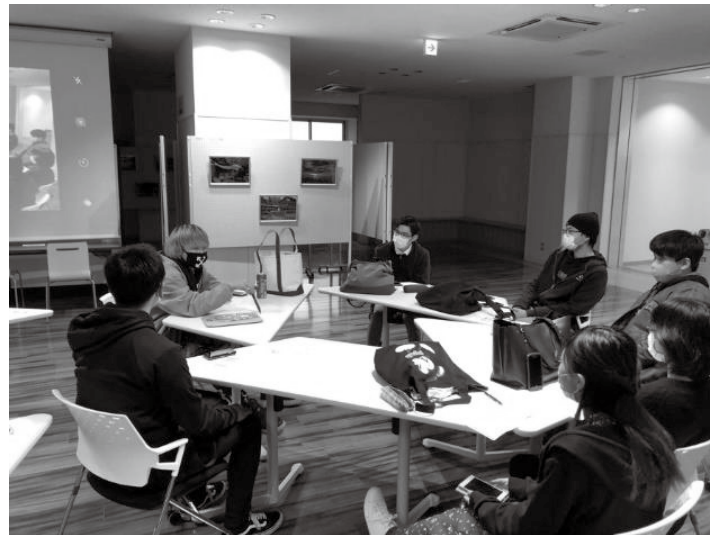
古民家を再利用したカフェの実例をはじめ全国各地の成功例がゼミ内で報告され、それを参考に空き家の1階部分をアートカフェとして開放し、2階部分をレンタルスペースとして開放してはどうかというアイデアが出された。まずはその案を議論することになり、カフェ内装の具体的なイメージについての意見を出し合った。シックで落ち着いた雰囲気、「アート」に重点を置いた美術館風カフェ、街中にひっそりと存在するオアシスを目指すオアシス風カフェ、動物愛護のイメージで内装を統一したカフェなどである。

しかし、カフェ運営について乗り越えるべき課題の指摘も出てきた。誰がカフェを運営するのか、食品などの在庫管理や保健所への食品衛生管理の申請はどうするのかといった問題である。カフェに常駐する最低限の従業員も必要になる。その役割を私たちゼミナールのメンバーが担うことは可能かどうかと考えると、持続的活動としては不可能である。少なくともカフェの日々の営業を私たちが支えるのは無理だろう。

また、カフェで食品を扱うには、専任の「食品管理責任者」を置かねばならない（下記の厚生労働省 HP の食品衛生管理者の関連項目を参照）。その要件を満たす人員をわれわれゼミ生から出すことも非現実的である。

結局、カフェをわれわれの手で実現するのは難しいという結論に至った。どのような形式にすれば人員不足を気にすることなく実施することができるか、考え直すことにした。そうして、自動販売機を用いた食品や飲料を販売するスペースとしてはどうかという案が出た。自動販売機を置くことで、人員無しでもカフェ的なスペースを実現できるという考えである。来場者が自動販売機でメニューを選び、アートを楽しみながら飲食をしながらゆったりと過ごす空間を創出する。ゼミではこの案を詰めることにした。来場者のターゲットは、地域を限定せず広域の若者を中心に考えるべきだと考え、その視点からカフェを展開するにはどうすべきか検討することにした。

〔図表 19〕 大学でのソフト事業案の検討



<参考文献>

- ・厚生労働省 ホームページ「食品衛生管理者」<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000049348.htm>（2021年1月5日閲覧）

4.3 発想の転換

以上のカフェ運営の案を中心に検討を進めて、その実現に向けた具体的な準備に話を進めていくことになった。そうして8月中旬にアドバイザー大竹様に来学いただき、直接アドバイスをもらいながら議論を進めた。しかし、それは結果的にそれまでカフェの案から発想を大きく転換する契機となった。

大竹様からいただいたアドバイスのポイントは、「他にはない、大胆で斬新なアイデアをよりたくさん出すこと。その中でできるものは全てやってみるといい」ということだった。

確かに、これまでゼミ内で検討してきた内容を振り返ると、自分たちのアイデアにはそれほど斬新さ・大胆さはない。そこで、空き家活用班メンバーは、カフェの案にとらわれずに、ソフト事業案を検討し直すことにした。各人が一つずつアイデアを出し、企画書を作成してゼミに持ち寄ることにした。

その後各メンバーが考えた事業案の概要と期待される効果を以下に整理した。

<企画案1>若者向けのゲームカフェ

〔概要〕

都市部で活況を呈しているゲームカフェを、中山間地域である栃尾に創設する。ギャラリー内に通信機器が設置可能であり、最新型ゲーム(PlayStation4、Nintendo Switch など)がプレイできるゲームカフェを整備する。大型プロジェクターも設置し大画面で多くの人を楽しんでもらう。主に若者をターゲットに集客して、中越地区における隠れた名所、究極にはゲーマーのメッカを目指す。

〔期待される効果〕

若者の取り込みが期待できる。若者が SNS による情報発信で PR に一役買うこととなり、ギャラリーの知名度向上が期待できる。栃尾地域を将来「eSports」のまちにできる可能性もあろう。

<企画案2>レンタル・スペースとして開放

〔概要〕

空き家ギャラリーの周辺には娯楽施設が存在せず、地域の高齢者の方々が集まって会話するための憩いの場を求めている住民は多いと考えられる。その需要に応えるべく、レンタルスペースとして、時間制やフリータイムで貸し出す。プロジェクターやディスプレイを設置し、ギャラリーの白壁に映画などの DVD 動画を投影して楽しんでもらう。なお、ギャラリースペースはそもそもレンタルスペースとしての運用が予定されているが、この企画では時間の区切りやスペースの区切りの面でより細かく対応して貸し出し、柔軟なレンタルスペースとして運用することをイメージしている。

〔期待される効果〕

身近で自由楽しめるスペースを提供することによって、コロナ禍で遠方への外出を控えている地域住民にとってオアシス的な場所に定着すると期待される。個展等の様々なイベントなどの合間にいつでも貸し出せ、柔軟性の高い活用ができる。結果として多くの人を集めることにつながると考えられよう。

<企画案3>ミニ・アクアリウムの運営

〔概要〕

コロナ禍にあって遠方への外出が難しい中で、地域住民の方々に近場で外出気分を味わえる場所としてミニ・アクアリウムのイベントを開催する。地域住民に身近な水族館として楽しんでもらうとともに、域外からの来訪者にとっても立ち寄るべきスポットとなることを目指す。

錦鯉の産地である長岡市山古志地域や小千谷市とコンタクトを取り、錦鯉の稚魚を提供いただき鑑賞してもらう展示、栃尾地域を流れる川に生息する魚を紹介する展示、寺泊水族館を参考にふれあいコーナーを作るといった企画展示を検討する。

〔期待される効果〕

ミニ・アクアリウムは、子ども・若者から高齢者まで年齢に関係なく楽しめる。年齢層を絞り込まずに企画でき、栃尾地域外からも人を呼び込む可能性がある。さらに、栃尾地域と他地域の協働による PR 効果やイメージ融合による新たな価値創造と広域的な知名度向上につながる可能性も秘める。

< 企画案 4 > 動物愛護活動への利用

〔概要〕

動物愛護団体の活動拠点として、主に動物譲渡会の会場に利用するスペースとして運用する。二階部分を宿泊スペースとして、動物との宿泊まりを体験してもらうこともできる。一般に動物譲渡には「仮譲渡」という方式があるが、このプロジェクトではその仮譲渡よりもさらに手軽な動物飼育が体験できる。動物と過ごしてみないと分からない状況を利用者が体験できる。その試行を私たちゼミ生と動物愛護団体の方とでサポートする。会場ではグッズも販売し、さらに参加費を徴収することで、金銭面での動物愛護の活動支援にも一役買うことを目指す。

〔期待される効果〕

宿泊スペースの利用による動物とのふれあいや動物との宿泊を可能にする点で、既存の動物譲渡会との差別化が図れる。動物愛護の理解を人々に深めるスペースとして広域的にも注目を集めると期待できる。将来的な捨て猫、捨て犬や、動物に対するネグレクト(放任)を防ぐ活用の拠点として、動物愛護に関心の高い人々を中心に、域外からの多くの人が訪れるようになる効果が期待される。

以上 4 点のソフト事業案の企画書をもとに、ゼミでは①実行可能性の高さ、②より多くの来訪者を呼ぶにぎわい創出効果、の 2 点から事業選別の議論を行った。

この頃には、空き家のリノベーション工事も着々と進んできており、ギャラリーの完成イメージをより具体化できるようになっていた。それにより、私たちの事業アイデアの考察も進歩していったように感じられる。

後述のとおり、結果として実行に移されたのはミニ・アクアリウム事業である。しかし、そこに至るまでに、以上のように複数のアイデア企画が考案できたことも、今年度のわれわれの活動として大きな成果ではないだろうか。次年度以降には、本年度実行されなかった事業案の展開も含めて、一層素晴らしいソフト事業案を検討していきたい。

(執筆担当) 竹内 葵

5. ミニ・アクアリウム開催への挑戦

5.1 ミニ・アクアリウム実施の方針決定

ソフト事業の検討議論を経て、今年度私たちは「ミニ・アクアリウム」に取り組むことを最終的に決定した。この決定は夏休み後の 9 月から 10 月にかけてだった。かなり切迫したスケジューリングだが、12 月 6 日から 12 月 9 日までの開催を目標に設定した。

決定後、同プロジェクトに関して大竹様からご意見を伺った上で、実現に向けた活動方

針と作業工程を話し合うことにした。そこでいただいた大竹様のご意見をヒントに、山古志地域の錦鯉の稚魚を用いたアクアリウムの実現を目指すことにした。その発想の元は、東京などで開催されているアート・アクアリウムのイメージである（〔図表 20〕参照）。

〔図表 20〕 東京日本橋のアートアクアリウム



（資料）毎日新聞ウェブサイト（URL <https://mainichi.jp/graphs/20200827/hpj/00m/040/005000g/2>）（2021/1/5 閲覧）

大竹様からいただいた情報によると、山古志地域などの錦鯉の養鯉場においては、孵化した後で育てていく前に選別され処分される稚魚が毎年出るとのことであった。それらを譲り受けてプロジェクトに活用することが可能かもしれない、というアドバイスをいただいた。

5.2 ミニ・アクアリウム実施のねらい～栃尾と域外交流による地域活性化

このプロジェクトでは、アクアリウム展示で来場者によるにぎわい創出が期待される。しかし、それだけではない。錦鯉養殖という長岡の地域産業の PR もできるということである。とりわけ展示終了後に錦鯉の稚魚を域内外の人々に譲渡して多くの市民に観賞用で大切に育ててもらえれば、長岡の錦鯉を詳しく知らない若い世代も含めて、長岡の地域資源を周知させる長期的効果が期待できる。

ゼミでの話し合いの中で、アクアリウムの元々の目的は栃尾地域の PR による活性化であったが、それに加えて長岡の錦鯉という地域の宝を PR するというテーマを加えることを確認した。栃尾域内外の架け橋となるようなコラボ的な活動である。栃尾地域でのアクアリウムの開催による栃尾の活性化とともに、山古志を中心とする地域産業の活性化という新たなテーマもゼミナールの活動の柱に据えることになったのである。

5.3 錦鯉についての学び～ヒアリング準備

このプロジェクト実現にむけて大きなネックは、私たちゼミ生の錦鯉に関する知識が皆無に近いということだった。錦鯉はどのように入手できるのか、どのように輸送するのか、飼育で何に注意すべきなのか、さらにはアクアリウムに必要な機材として何を揃えるべきか。これらのノウハウが全くなかった。

まず、これらの基本知識が必要である。残された時間は少ないことから、必要な基本情

報を至急収集するため、識者から直接お教えいただくべきだと考えた。アドバイザー大竹様からは、長岡市錦鯉養殖組合という組織があることをお教えいただいた。ミニ・アクアリウムの実現にはその方々にお話をお聞きすることが不可欠であると考え、ゼミのメンバーが直接うかがって錦鯉についての教を請うとともに、ご協力をお願いすることにした。

同時期、アクアリウムのレイアウトや内装に関する話し合いも進めていた。特に話し合いを進めようとしていたのは以下の2点である。

①錦鯉の稚魚の展示数と水槽の調達法、飼育に必要な物品の確認と調達

②会場の飾りつけに使う物品及び調達方法の検討

このうち、とりわけ①を詰める前提として、錦鯉をどの程度入手できるのかを確定しなくてはならないが、現状ではまったく未知だった。

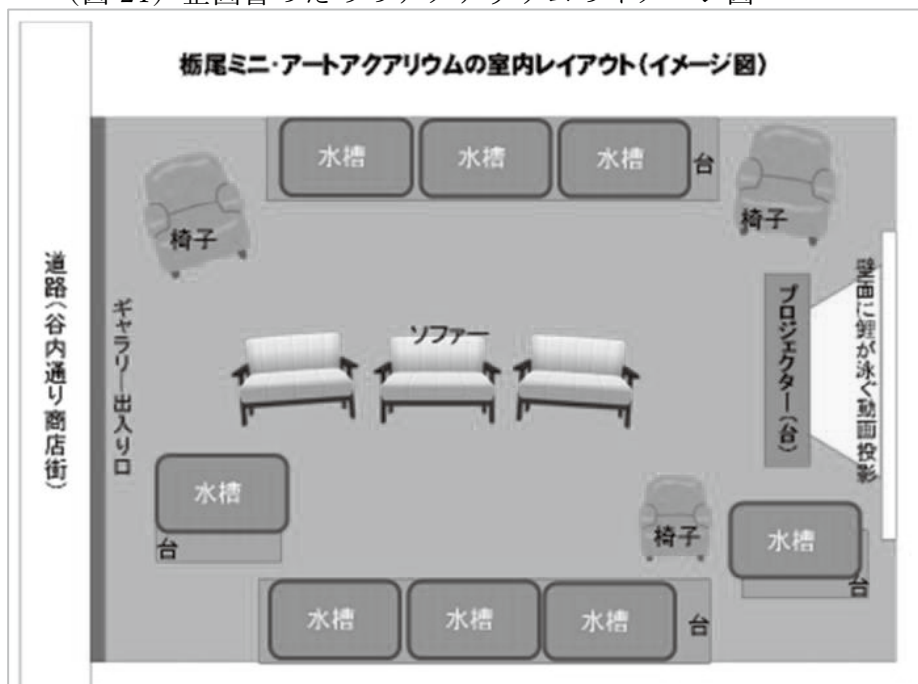
さらには、②の検討についても、主役となる錦鯉の数、水槽の数などが未確定なので、備品等の具体的な個数などの詳細は議論できない。必要な物品リストの確認程度にとどめて話し合うしかなかった。

結局、アクアリウムの会場整備方法の検討で前提となる基本的な部分は、専門である養殖組合の方にお聞きしてから決めるべきだということになった。各備品等の具体的な数などについては、ヒアリングでお聞きした内容を踏まえて改めて相談することにした。

以上を踏まえて、錦鯉養殖組合様へのヒアリングの準備をゼミで話し合った。養殖組合様へは、錦鯉に関する基本情報とともに必要な物品についての知識などもあわせてお聞きすることにした。

さらに、われわれがどのような展示を想定しているかを養殖組合様へお伝えできるよう整理し、あらためて企画書を作成することにした。その企画書のために、アクアリウム完成のイメージ図を作成した（〔図表 21〕参照）。

(図 21) 企画書のためのアクアリウムのイメージ図



5.4 長岡市錦鯉養殖組合様と長岡市錦鯉ブランド戦略室様へのヒアリング

10月16日に長岡市鯉養殖組合山古志支所様へお話を伺うために訪問した。今回のヒアリングでは、長岡市錦鯉養殖組合事務局 上田孝子様だけではなく、長岡市錦鯉ブランド戦略室室長 戸田幸正様、同主事 由井良和様にも同席いただけて、3名の方々からお話を伺うことができた。上田様は長岡市の養鯉業者の方々とともに養鯉業に携わっておられる。錦鯉の基本の話から養殖についての詳細のお話を伺うことができた。また戸田様は、かつて長岡大の地域活性化プログラムにおいてアドバイザーを務めて下さったこともある方で、私たちによる地域活性化の取組主旨を深く理解して下さっており心強かった。

このヒアリングにおいてお聞きしたポイントを以下にまとめた。

< 錦鯉の現状について >

長岡の錦鯉は、現状では70~80%が海外市場で販売されている。これは、1990年代のバブル崩壊、2008年のリーマンショックなどによって国内販売が減少したのが大きな原因である。その後の景気回復によっても錦鯉の国内需要は回復していない。このお話から、あらためて私たちのゼミ活動が、国内での錦鯉PRに向け一助となれば良いと考えた。

(図 22) 山古志の長岡市錦鯉養殖組合様でのヒアリング



< 二十村郷について >

長岡市の錦鯉養殖組合様、および錦鯉ブランド戦略室様が地域内外に魅力を発信したいとお考えなのは、「山古志の錦鯉」ではなく「『二十村郷』の錦鯉」である。「二十村郷」とは長岡市と小千谷市にまたがる区域である。この地域の錦鯉は、二十村郷における200年以上の歴史ある活動により生み出されたもので、「二十村郷」の「雪の恵みを活かした稲作・養鯉システム」という地域の農業文化は農林水産省の日本農業遺産に登録されている。

そうしたことから、「小千谷の錦鯉」「山古志の錦鯉」という形ではなく、「二十村郷の錦鯉」という地域資源として理解してほしいというお話をいただいた。私たちの地域活性化プログラムでは、この「二十村郷」の広報を推進していきたいと考えた。

<二十村郷の錦鯉の発祥>

二十村郷は山間部でありかつ豪雪地帯のために食料の運搬が難しく、食料確保は死活問題だった。その解決策として、古くから食用のための鯉が飼育されていた。二十村郷に多くみられる棚田の貯水用の棚池活用による飼育だった。そしてなかで、飼育していた鯉の突然変異により、鮮やかな模様がついた「変わり鯉」と呼ばれる鯉が生まれた。その後、明治時代に入り交配・改良が重ねられて、現在の錦鯉にまで発展したのである。錦鯉養殖業者は全国に500か所ほど存在しているが、そのうち350か所ほどは新潟県内に集中している。これからも、養鯉産業における二十村郷の重要な位置づけがわかる。

<現在の錦鯉養殖について～養殖の流れ>

錦鯉の成長は養殖池や日照時間によって左右される。養殖池のサイズが大きいほど鯉はより大きく育ち、日照時間の長さも鯉が大きく育つ因子となる。また、人工的に作られた養殖池では、池のサイズのみならず池に用いる土を変えることによっても色や艶、大きさが変わる。

養殖は春に親魚を掛け合わせる「交配」から始まり、夏には色彩や斑紋などの態様から売れる見込みのある稚魚を選ぶ「選別」が行われる。最終段階まで選別は3～4回行なわれ、最終的に残る錦鯉は孵化したうちの1～2%程度で、選別で残されなかった稚魚の多くは処分される（「土にかえす」など）。その段階では、選別されなかった稚魚の提供は十分可能だと思ふとお話だった。

孵化後2年目の春には、販売用の鯉と「立て鯉」と呼ばれる二歳魚に成長させる鯉の2つに選別される。立て鯉に選ばれた鯉は、夏の間人工的に作られた比較的大型の「野池」に放たれ、大きく成長させる。そうして秋まで育てた後に「池揚げ」という作業を経て出荷される。



(資料) 日本政策投資銀行、「新潟県内錦鯉産業の強み」より

<参考文献>

- ・日本政策投資銀行、「新潟県内錦鯉産業の強み」 URL https://www.dbj.jp/topics/region/area/files/0000030815_file2.pdf (2020/12/26 確認)

5.5 錦鯉提供の相談

ヒアリングでは、以上のお話をお聞かせいただくとともに、私たちが企画している錦鯉を用いたミニ・アクアリウムの企画をご説明した。それに対して、私たちへの錦鯉提供に

ついて前向きに検討して頂けるとお話しいただけた。栃尾と二十村郷の協働、さらには「ALL長岡」の取り組みとして、私たちのアクアリウムの企画に期待したいとおっしゃって頂けたのである。

しかし注意すべき点として、錦鯉養殖組合の上田様は、一年のこの時期ではその年生まれた鯉はある程度成長し、育てる鯉を選別し終えた後であり、全ての鯉についてすでに価格がついている段階だということを説明くださった。夏頃までの孵化して間もない状態であれば、無償に近い形で多くを譲っていただくこともありえる状態だったのだが、時期が遅すぎたのである。

難しい現状を知り悲観しながらも、錦鯉入手に向けて何か方法がないか、上田様にご相談した。長岡の錦鯉養殖業という地域産業振興の取り組みであるとの主旨をお伝えしつつ、どうすれば良いかお聞きした。すると、「みなさんはとても良い取り組みを考えてくれているので、組合としてもできるかぎりの協力を検討したい」という大変ありがたいお言葉をいただけたのである。

その上で、私たちの企画をもっと詰めた上で連絡するように指示され、その企画書をもとに組合として具体的に検討したいとお話をいただいた。そのご指示を受けて、ゼミで急いで企画の詳細を詰めることが必要になった。

5.6 ミニ・アクアリウム実現に向けた企画の詰めと準備作業の開始

5.6.1 アクアリウム・イベントの名称決定：「昼想夜夢」

今回の山古志でのヒアリングでお教えいただいた内容を踏まえて、アクアリウムの企画の詰めに急いだ。

まず、アクアリウムのイメージを徐々に固めることができたことから、イベントのタイトルを定めることにした。実施を決定した当初段階でみんなが抱いていた「夜」のイメージに、開催場所「白昼堂堂」から得たインスピレーションを加味して、「昼想夜夢」というタイトルを考案した。

昼想夜夢とは、いつも思い続けているという意味を持つ言葉である。私たちは、その言葉に対して、文字通り夜をイメージした空間を昼のうちからも楽しめるようなものにしたという思いを重ねたのである。さらに、「二十村郷の変わり鯉」を発信していきたいと考えて、安直な発想ではあるがそれをそのままサブタイトルとしてチラシに明記することにした。そうして、チラシを手にした人にその単語が真っ先に目につくように据えた。

5.6.2 錦鯉の手配～長岡市錦鯉養殖組合様のご支援

実際に錦鯉を入手できるかどうか、それは最後まで課題だった。

上述のヒアリングの後に担当教員のサポートも受けて企画書を作成し、上田様にご相談した。そうして、その企画書をもとに組合様で検討いただいた結果、同組合員の川口地区の養殖業者様から、その年に生まれた錦鯉を中心に 50 尾の貴重な鯉を提供いただけることになった。上田様によると、複数業者による鯉の混成では移動時の管理や水槽分けが複雑になるので、単独業者に提供いただけるよう調整してくださったとのことだった。違う環境で育った錦鯉を一緒に泳がせると、鯉が調子を崩すことが多いからである。

錦鯉は、会場「白昼堂堂」で水槽の準備が完了した後に、組合様が搬入して下さることとなった。さらにその後の日程調整によって、ホテルニューオータニ長岡での成果報告会の前日 12 月 4 日に、まず上田様と長岡市錦鯉ブランド戦略室室長の戸田様が会場の水槽と水質の確認に来られて、翌日 12 月 5 日に再度上田様と業者様が搬入作業に来て下さることになった。

ゼミではその両日の対応のための担当者 2 名（3 年小泉・永田）を決定し、残りの 5 名をニューオータニでの成果報告の発表担当者に決定した。

5.6.3 水槽の手配～長岡市内小学校のご支援

次の大きな課題は水槽の手配である。

当初は 5cm 程度の稚魚を想定して水槽の大きさなどを検討していたが、お譲りいただける鯉は 15cm 前後のサイズにまで成長した鯉であることが分かった。それを踏まえて、水槽の具体的な確保策を再検討した。ある程度成長した錦鯉を提供いただけることから、当初の想定よりも大型の水槽を複数用意することが必要となり、それをいかに手配するか、ゼミで話し合った。

結局、アドバイザー大竹様からのヒントをもとに、市内の小中学校からお借りできないかあためようということになった。玄関や応接室で金魚などを水槽で飼っている小中学校は多いが、飼育をやめて使っていない水槽を保有する学校も少なくないのではないかと考えたのである。また、水槽をお借りするとともに、アクアリウム終了後に展示した錦鯉を引き取って飼育していただけないかという依頼も進めることにした。

ゼミではさっそく市内の小中学校のリストを作成して、それをもとに担当学校をゼミ生全員に割り当てて、電話連絡を開始した。しかし、依頼はスムーズに進展しなかった。ある学校にお電話したところ、教頭先生から「そうした話は教育委員会を通してから連絡してもらわないと困る」とお叱りをいただく事態も生じた。そこで、途中段階ではあったが全員による小中学校へのお願いの連絡はいったん中断することにした。

一方で、そうした中でも中断前に 4 年竹内寛織が連絡した 3 つの小学校が水槽の貸出を快諾下さっていたのである。以下の長岡市立の 3 小学校である。

①浦瀬小学校様

②石坂小学校様

③岡南小学校様

上記の三小学校には、錦鯉の引き取りのご検討も依頼した。今回のアクアリウム事業の目的の一つは、展示期間終了後に錦鯉を市民に譲渡し大切に育てていただいで長期的な長岡の錦鯉 PR につなげていくことであった。その達成のために、水槽の借用とあわせて鯉引き取りもお願いしようと考えたのである。3 校とも、何とか受け入れられないか学校内で検討して下さったが、結論としては承諾いただくことができなかった。

後日、4 年竹内寛織が各学校の担当の先生から指定いただいた日時に訪問して水槽をお預かりした。その際に、「借用書」が必要だとしてご指示いただいたので、急ぎよ作成してお渡しした。こうして、大小計 6 つの水槽が揃い、ゼミ教員の研究室に保管することにした。（〔図表 24〕参照）

これ以上水槽を手配することは時間的に難しいと考えられたので、6つの水槽1つあたりに7~8匹程度の錦鯉を入れていただいて、合計50匹程度を展示するという計画となった。

〔図表 24〕 お借りした6つの水槽（ゼミ教員研究室）



その他、エアーやホースといった物品はゼミナールの予算で購入することにした。飾りつけに使う物品およびヒアリングで伺った必要な物品、さらに水槽に付属すべき物品をリストにまとめ、後述の会場レイアウト原案を作成した3年小泉、永田が活動予算を活用して手配した。

5.6.4 錦鯉搬入のための事前準備

11月に入り12月5日の錦鯉搬入が近づいて、錦鯉養殖組合の上田様からご連絡いただき、錦鯉を迎え入れるための注意事項をご指示いただいた。錦鯉は長岡の「宝」でもあり、さらには錦鯉養殖という長岡が誇る地域産業の貴重な産物である。何よりも命あるものをお預かりするのである。細心の注意・対応が求められ、粗末に扱うことは決して許されない。

上田様からいただいたご指示のポイントは以下のとおりである。

- ・ 錦鯉は観賞魚のなかでも飼育しやすい魚ではあるが、水環境が非常に重要であり水には十分注意を払う必要がある。
- ・ 提供される錦鯉は今回のアクアリウムのために自分が生まれ育った養鯉場から初めて巣立つ。生産者はできる限りのケアをして「旅に出す」ことを考える。
- ・ 「餌止め」や「消毒」を行わないと輸送中に弱ったり、自ら水環境を悪くする原因を作ることもある。
- ・ 水槽に錦鯉を入れるまでの流れは以下のとおり：
 - ① 錦鯉を水槽に入れる日程を確定し、その日程を養鯉場様へ連絡。遅くとも3週間前には連絡し準備をお願いせねばならない
 - ② 養鯉場様は搬入する錦鯉を選別し搬入日から逆算し消毒や餌止めを行う。餌止めには1週間~3日程度必要
 - ③ 大学の皆さんは、錦鯉を水槽に入れる3日~1週間前には水槽を設置し水を作ること。水槽の水量に対して0.5%の量の塩を入れてエアーで水を循環させておく。そ

れにより塩分濃度が均一になりカルキが抜ける

- ④搬入当日に錦鯉を水槽に入れるさい、水槽内に袋ごと錦鯉を入れ水温が同じ温度になるまで待つ(30分～1時間。温度変化が少ない時期はすぐに入れる事もある)。

以上のご指示に基づいて、12月6日のオープン予定日から逆算して、12月初頭には水槽の設置と水入れを完了しておかなければならないことを確認した。会場「白昼堂堂」を管理される大竹様と加治様に相談して、会場の空き状況を確認して、内装・レイアウト整備の作業スケジュールを検討した。

5.6.5 アクアリウム開催の広報活動～チラシ・パネルの作成など

以上の準備作業と並行して、今回のアクアリウム実施のPRも課題だった。まず、チラシを作成することにした。4年旭と竹内寛織が文面を作成し、それをもとにアドバイザー大竹様がデザインしてくださった。([図表 25] 参照)

あわせて、錦鯉養殖業という地域産業PRのために、山古志でのヒアリングでお教えいただいた「二十村郷」の錦鯉について来場者に知ってもらうためのパネルづくりに取り組んだ。4年駒形がヒアリング結果や様々な資料の調査により得た知識をまとめて文面を作成し、それをもとにデザインを大竹様にお願いしパネルを完成した。([図表 26] 参照)

より広域の広報のために特設ホームページの作成も検討したが、開催まで日がなかったことから断念した。ゼミ担当教員を通じて、大学公式ウェブサイトと公式Instagramへの情報掲載を依頼した。開館後にはなったが、地域おこし協力隊員加治様のFacebook、栃尾タイムスのFacebook等にも掲載いただけた([図表 27] 参照)。

とは言え、基本的にはPRが不十分だったことは課題だった。

〔図表 25〕 完成した「昼想夜夢」のチラシ

昼想夜夢

～二十村郷の変わり鯉～



この度、私たち長岡大学地域活性化プログラム石川ゼミ第3班は、栃尾地域活性化委員会様が実施する、空き家をギャラリーへとリフォームする事業に参加いたしました。喜ばしいことに、同ギャラリーは報道番組にも取り上げられ、オープン以来、使用者も多く、集客の面でも高い実績を残すことができています。

今回、このギャラリー白昼堂にて、私たち長岡大学地域活性化プログラム石川教授ゼミ第3班は、あるイベントを開催いたします。

山古志の錦鯉養殖組合様のご協力を頂き、錦鯉を使ったミニアクアリウムを開催することになりました。今回展示する錦鯉は、水槽でも飼育できるよう、敢えて大きくならない育て方をされた特別な錦鯉です。

これらの錦鯉に加え、トチオノアカリ協議会様のご協力で、古くから栃尾の繊維産業で使われていた糸線枠に栃尾産の糸を美しくあしらった色とりどりのランプで会場を美しく飾ります。

山古志村と栃尾市。隣接し昔から往来・交流のあった地域が同じ長岡市になり、早10年以上が経ちました。

短い期間ではございますが、この展示をご覧いただくことで、山古志と栃尾、互いの地域産業に対する知識や思いを共有し、ともに発展できる地域としての未来を考えるきっかけになれば幸いです。

皆様のご来場お待ちしております。

日時：12/6(日)～12/9(水)
時間：11:00～18:00
会場：ギャラリー白昼堂(旧よってげ場)
住所：長岡市谷内2丁目1番28号

主催：長岡大学 / 栃尾地域活性化委員会 協力：トチオノアカリ協議会

知ってる？ 錦鯉について

日本農業遺産とは

日本農業遺産は、我が国において重要かつ伝統的な農林水産業を営む地域(農林水産業システム)を農林水産大臣が認定する制度です。



二十村郷の錦鯉は200年以上の歴史があり、「日本農業遺産」認定第一号となっています。日本において重要かつ伝統的な農林水産業を営む地域として重要視されています。現在も日本に500か所ほどある業者のうち350か所ほどの業者が新潟県内に集まっています。

しかし、2000年代以降の不景気などの影響により海外での市場が日本の市場より大きくなっています。錦鯉発祥の国として今までよりも理解や関心を持っていただけると幸いです。

錦鯉は水槽でも飼育できる！

鯉の大きさは飼育している水槽や池の大きさに依存して変化します。一般的な野池で育てられた鯉は大きなもので1mほどまで育ちますが、水槽での飼育用に育てられた鯉であれば成魚の段階であっても20cm以下のサイズを保ちます



錦鯉を生み出したのは、長岡市太田地区、山古志地区、川口地区、小千谷市東山地区の一角をひとまとめにした二十村郷という地域が発祥となっています。二十村郷は山間部でありさらに豪雪地帯であるため食料品を運ぶことが困難であり、食料の確保は重大な問題でした。そこで、棚田の貯水池である棚池を活用し、食用として鯉を飼育していました。そして、飼育していた鯉が突然変異したことにより模様鯉が生まれ、交配・改良を重ねていくことにより現在の錦鯉として知られるようになりました。

鯉が販売されるまで

錦鯉の稚魚が販売されるサイズまで成長するには1年程度かかります。

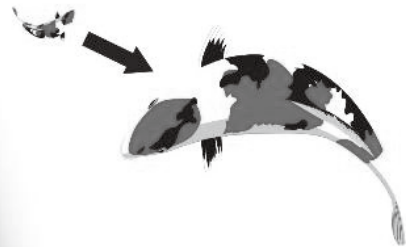
春に親魚を掛け合わせる「交配」を行い、夏の期間に色彩や斑紋などを見定め、見込みのある稚魚を厳選する「選別」をおよそ3-4回程度行います。

この「選別」によって残る鯉は全体の12%に留まり、その他の稚魚はほとんどが処分されてしまいます。

翌年の春に、販売用の鯉と二歳魚に成長させる鯉に選別されます。(今回アクアリウムに用いられている鯉は、この時期に販売される段階の鯉となっています。)

そして二歳魚として育てられる鯉は「立て鯉」と呼ばれるエリートとして野池で育てられ、二年目の秋に品評会などを通して販売されます。

稚魚から販売されるサイズまで1年



養鯉業はアグリカルチャー

餌や水も当然重視していますが鯉の飼育と一見なんの関係もなさそうな土も、鯉の飼育の中で重要なもの一つとなっています。

鯉を大きく育てるために人工的に作成した野池を使用しますがその野池の土を作るところから鯉の養殖は始まっています。

野池の土を変えることにより鯉のサイズや色、艶といったものが変化します。

この土を決めるうえでの採配は科学では判明しておらず、職人の経験や勘によって管理されています。

これらのことから、山古志の鯉は、地域に根付く、農業の文化であると定義されているのです。

棚田が見える美しい里山の山古志地区。板尾にも良く似た景色が多くあります。



〔図表 27〕 栃尾タイムス Facebook でご紹介いただいた



(執筆担当) 駒形昌亮

6. アクアリウムの会場準備

6.1 会場整備の作業

6.1.1 会場レイアウトの検討

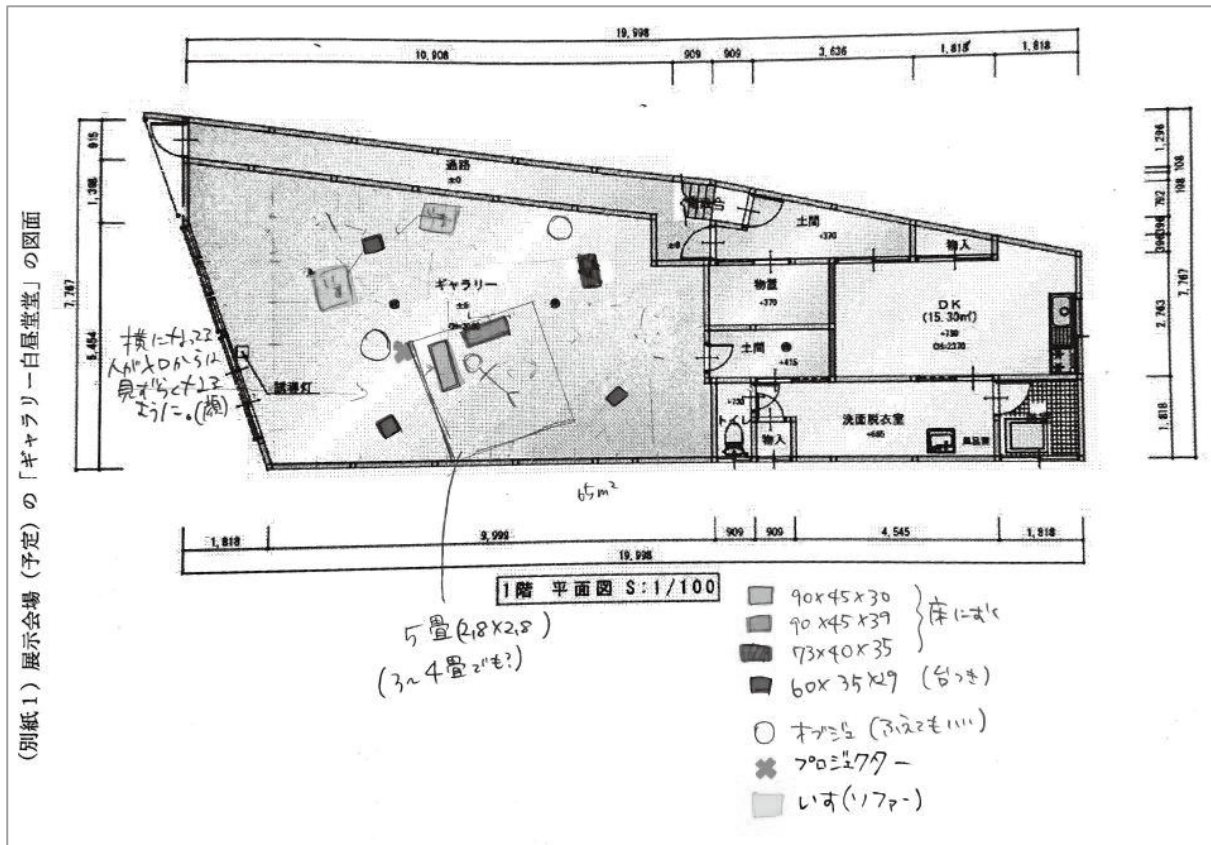
市内3小学校からお借りした水槽および木材等の資材を白昼堂堂に搬入し、会場でアクアリウム開催に向けた準備を本格化した。逆算して段取りを考えた結果、会館前の1週間は毎日現場に詰める日程により準備を進めることになった。

アドバイザー大竹様と加治様にもご協力をお願いし、会場セッティングのアドバイスをいただくとともに作業手順も指示してもらい、ギャラリー図面を作成しそれをもとにした作業をゼミで詰めた。完成したレイアウト案が〔図表 28〕である。その実現を目指して、具体的に椅子、ソファ、その他インテリア関連の配置を整えることにした。

6.1.2 備品の整備

会場で用いる備品整備も課題となった。上述のとおり水槽は市内の小学校からお借りできたが、水槽を設置する台、来場者が休憩するためのソファ、その他の備品の調達が問題だった。水槽台については、最低限の費用により加治様に作成いただけることになった。ソファは大学の備品を借用する案が出たが、結果的にお借りできず、大竹様に手配いただくことになった。受付のテーブルやコード類等は、ホームセンター等で購入した。

〔図表 28〕 アクアリウム会場のレイアウト案



一般的な錦鯉の飼育環境を整えるため、エアポンプなどの物品を列挙し、購入の手段や予算を考えるとといった準備も進めた。

開催日時が迫る中、私たちは加治様に作っていただいた水槽台とインテリア用に用意頂いた流木のペンキ塗りに取り組んだ。色むらができないように指導を受けたが、意外に難しく、所々色が濃い部分と薄い部分ができってしまった。また、自分の手や服にペンキが付いて洗ってもなかなか落ちなかった。何とか塗装を終えた流木は麻紐で括り付けて支柱とし、柱の上に細い流木を渡した飾りとして設置できた。水槽ポンプのホースや配線の目隠しにするとともに、来場者の見学の導線づくりを意識して配置した。

お借りした水槽は汚れている部分もあり、鯉がきれいに見えるように掃除をした。上記の会場レイアウト案に従い、水槽台をみんなで運びその上に水槽を設置した。そして、鯉のための水づくりのために、水槽6個に水を入れて鯉を迎える体制を整えた。

〔図表 29〕 レイアウト案にもとづいて水槽を設置



〔図表 30〕 ペンキ塗りを急ぐ

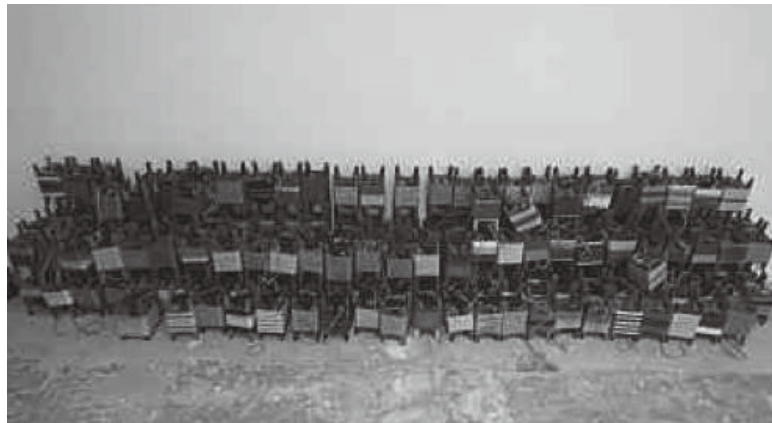


6.2 トチオノアカリ協議会との協働

大竹様からのご紹介により、トチオノアカリ協議会の方々から「トチオノアカリ」ランプを貸していただけることになった。「トチオノアカリ」とは、域外にもファンの多い栃尾地域のイベントで、近年は遠隔地からも多くの人を訪れるお祭りである。同協議会事務局の方々が、「栃尾の地域活性化のためなら」と、同イベントに使われる貴重なLEDライト（織物のまちである栃尾を象徴する糸繰木杵を使ったランプ）を快く貸して下さった。

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大により、トチオノアカリのイベントが例年通りに開催できなかったそうである。それだけに、私たちがその分このミニ・アクアリウムにより地域を盛り上げたいという意を強くした。

〔図表 31〕 トチオノアカリ協議会の方々からお借りしたランプ



〔図表 32〕 流木を用いた飾りとランプによる飾り付けの完成



このアカリの雰囲気を活かすため、水槽周りにランプをレイアウトした。さらに、天井からも吊せるよう工夫して、アクアリウムのテーマでもある「夜」を作り出そうとした。お借りしたランプをすべて活用して、インスタ映えする幻想的な空間を創出できた。

〔図表 33〕 レイアウトと内装が完成して錦鯉受け入れの準備完了



さらに、レイアウト図に基づいて、プロジェクターとパソコンをお借りして、壁面に錦鯉の動画を投影し、雰囲気盛り上げることにした。当初は、ゼミ生が錦鯉の動画を作成して流す予定にしていたが、動画作成の時間がなかったため、著作権フリーの錦鯉動画をYouTubeで探して、開館時間中はずっとその動画を投影することにした。

こうして、何とか会場を整えることができた。ニューオータニ長岡での成果発表会の前夜である。翌日の発表では ZOOM による同時中継を予定していたので、整備が未完のギャラリーで、大学からお借りしたビデオカメラとパソコンを設置し、撮影法や通信状況の確認を行った。ホテルニューオータニにもゼミ生が待機して、栃尾との ZOOM 通信の確認を行った。機材の故障等で多少手こずったが、最終的に中継のめどを付けることができた。

そうした作業で手一杯となり、私たち空き家班グループでは翌日の成果発表会に向けた全体練習にはまったく取り組めなかった。各自の発表担当部分を割り当てるだけに終わり、翌朝までに各自が担当箇所について発表練習をして、ぶっつけ本番で臨むことになった。

6.3 錦鯉の到着

成果報告会当日の 12 月 5 日、いよいよ錦鯉養殖組合の上田様と養鯉業者様が錦鯉の搬入で来場下さった。上田様は前日にも来場され水槽の水のチェックと塩度調整をして下さっていたが、この日は錦鯉 50 尾とともに来訪された。

鯉の搬入や水槽入れの工程は専門的な作業である。鯉はビニール袋に入れられ、呼吸のための酸素がパンパンに入った状態で搬入された。個々の鯉は様々な色でバリエーションがある。その点から、上田様と業者様がギャラリー内の 6 つの水槽の大きさ、錦鯉の大きさ、色、バランスを見ながら、私たちの要望を聞いて下さった。そうして、錦鯉を各水槽に入れてくださった。

作業終了後に上田様から、鯉は水温が下がってしまうと底で不活発化し動かなくなってしまうこと、泳いでいる鯉が飛び跳ねて水槽から飛び出してしまうことがあること、など

の注意すべき点を教わった。

それらの指示に従い、室内の温度を下げないようにエアコンを常につけた状態にするとともに、毎日閉館した後に鯉が水槽から飛び出してしまうないように段ボールで水槽にふたをするなどの手順を確認した。

〔図表 34〕 錦鯉を水槽に入れていただく作業



〔図表 35〕 ミニ・アクアリウム遂に完成！



最後に、上田様に完成したミニ・アクアリウム全体を見ていただいた。「錦鯉とトチオノアカリがとても合っている」、「きれいだ」、「ありがとうございます」など多くのありがたいお言葉をいただいた。

このアクアリウムは、栃尾地域の活性化だけでなく山古志を始め二十村郷の錦鯉を PR するという地域を越えた全域的な期待を背負った企画になったのだということをあらためて強く感じた。

(執筆担当) 小泉 日和

7.ミニ・アクアリウムの開催

7.1 成果発表会と会場最終確認の同時進行

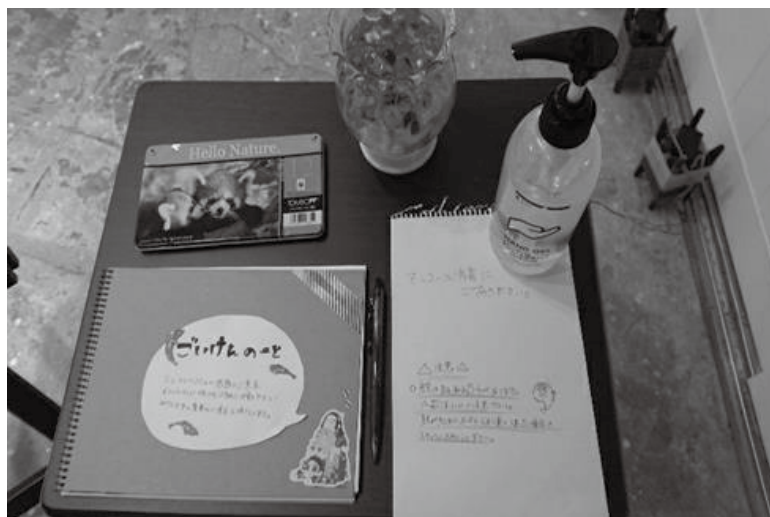
ホテルニューオータニ長岡で各ゼミの成果発表会リハーサルが開始されたころ、私たちのグループは翌日スタートのアクアリウム会場でも準備作業を進めていた。当日朝、3年小泉・永田の2名はアクアリウム会場のギャラリー白昼堂堂にむかい、前述の錦鯉搬入の対応など最後の準備作業に取り組んだ。

午後の成果発表会においては、小泉・永田が現場で作業を進めながらも、アクアリウムの様子を ZOOM によりホテルに生中継した。発表のタイミング調整、撮影、ZOOM 操作などが最後まで不安だったが、実況中継は何とか成功した。成果報告会会場で大きな反響をいただくことができた。

成果報告会での発表を無事終えた後、翌日のイベント開始に向けて、開催中の担当者による対応として、以下の注意事項5つを確認した。

- ① コロナウイルスの対策として、来場客にアルコール消毒を依頼
- ② 実績として記録するために来場者の数を記録
- ③ ご意見ノートを用意し、来場者様の意見を聞き、反映できるようにする
- ④ お越しくくださった来場者様の様子を（後方から）写真撮影
- ⑤ 展示終了後の鯉の引き取り依頼と無償譲渡を来場客に声かけ

〔図表 36〕 受付台のご意見ノートとコロナ対策のアルコール



7.2 イベント日程と担当者

12月6日朝、ミニ・アクアリウム開催の初日を迎えた。その開催要領は以下のとおりである。

- ・開催日程：12月6日～12月9日
- ・開館時間：11:00～18:00
- ・会場：レンタル・アート・ギャラリー「白昼堂堂」長岡市谷内2丁目1番28号
- ・当日運営に当たる担当者：

日付	学生氏名
12月6日	竹内寛織、駒形昌亮
12月7日	旭 和馬、温 嘉楠
12月8日	永田藍美、小泉日和
12月9日	旭 和馬、竹内寛織、駒形昌亮
12月10日（撤収日）	ゼミ生全員

7.3 イベントの4日間を通して

4日間、大きなトラブルもなくイベントを終了できた。特に、開催期間中に谷内通りの近隣の方々から昼食を差し入れていただくなどご支援いただき、大変ありがたかった。

毎日18時まで開館し、17時頃以降は勤労者や通学者が立ち寄ってくれるのではないかと期待したが、時間帯による来場者数の傾向はあまり明確ではなかった。会場向かいのまちの駅「とちパル」が火曜日定休日であり、その影響で3日目（12/8）の火曜日は来訪者が少なかった。

アクアリウムを実施した結果を振り返ると、私たちとしてはアクアリウムそのものはおおむね良い結果で終わることができたと考えている。開催期間がわずか4日間で、さらにコロナの影響があったなかでも、ご来場者は合計で150人を超えた。

ご来場者からは、「想像以上に幻想的な雰囲気だった」「鯉の良さを知ることができた」などの意見をいただくことができた。リピーターとして何度も来てくださった方もおられ、知人にアクアリウムを勧めてくださった方もいた。来場者の皆さんはみな今回のイベント内容に肯定的であった。

なお、錦鯉の譲渡に関する声掛けにより、展示した錦鯉のすべてを地域住民の皆さんにお譲りすることができた。その点からも、私たちが目的とした①アクアリウムの集客、②二十村郷の鯉の譲渡、の2点において結果を残せたのではないかと感じる。

7.4 ミニ・アクアリウムの課題

7.4.1 会場外でのPR

しかし、問題点も少なくなかった。

まず、ご来場いただいた方からご指摘いただいた点として、会場内の様子が外から見えないという問題があった。外の光をさえぎるために会場空き家は扉と暗幕で締め切っていたため、外からは中の様子がまったくわからない。実際に、「何をしているのかわからない」

「準備中なのかと思った」という声をいただいた。（〔図表 37〕 参照）

そこで、当初会場内に設置していた「二十村郷と錦鯉について」のパネルを外に設置するとともに、スタッフ 1 人が外に待機して、通行者に声掛けしてご案内するなどといった対策を実施した。それでもなお、中での展示がわかりにくいというご意見をいただいた。何らかの改善策が必要である。

〔図表 37〕 開館中の会場入り口



7.4.2 適切な水温の維持・電池の消耗

水槽の水温管理にも課題が残った。錦鯉は水温が低下すると泳がずに底でじっとしてしまふ。開館中、展示場の温度が下がり、錦鯉がなかなか活発に回遊してくれなかった。会場の雰囲気として問題だと感じられた。

これは事前に養殖組合様から注意いただいていた点でもあり、展示室の温度を上げるためにエアコンにより室温を高く保つなどの対策をとってはいた。しかし、とりわけ床に直接設置した水槽は床からの冷気で水温が十分上がらなかったようだ。何らかの対策を検討する必要があると考えた。

〔図表 38〕 水温低下により底で泳がなくなった様子



また、開催2日目に入るとトチオノアカリのLEDランプの電池の電力が弱まってきた。このLEDランプは一つ一つが乾電池で光る仕組みだったため、電池消耗と共に光が弱くなり、完全に消灯してしまうものも出はじめた。全体的に会場が暗くなりはじめ、LEDライトの電池の状態により会場全体の雰囲気のカオリティが左右されてしまうことをあらためて認識した。

そこで充電装置をお借りして充電式電池の充電作業を進めるとともに、急ぎょホームセンターで予備の電池を大量に購入して電池入れ替え作業も進め、何とかインテリアの照明維持を図った。

良いコンディションを維持するには、あらかじめ予備電池を用意しておく、余裕を持って準備時間などに一括で入れ替える、などの準備を整え明るさにムラがでないような対策を講じる必要があることを学んだ。

7.4.3 イベント終了後の錦鯉の譲渡

イベント終了後に錦鯉を大切に飼っていただける方への譲渡も課題だった。今回のイベントでは、長岡市錦鯉養殖組合様から貴重な錦鯉をお預かりし、アクアリウム終了後に責任を持って飼っていただける先に錦鯉をお渡しすることが重要だった。それによって、長岡の宝でもある錦鯉を地域の方々に広くしかも持続的にPRすることができる。鯉の養殖業という長岡の地域産業の振興のためにもきっちりと実現せねばならなかった。

事前の準備段階における市内小学校への引き受け依頼は成功しなかったが、幸い開催期間中の来場者への働きかけに対して、何人かの方から引き取りたいという申し出をいただいた。それに対して、今回は全ての鯉を適切にお渡しすることができた。

今後同様のイベントを開催するとすれば、引き取り希望者に関して、ずっと大切に育てていただける方であるかどうかをどのように判断するのか、また引取者の予約の扱いをどうするか、具体的な鯉の渡し方をどうするのか、などの細かい点を事前にしっかりと定めておく必要があることを改めて感じた。

加えて、鯉をお渡しする際の搬出方法も事前にしっかりと確認しておくべきである。特に自宅等へ持ち帰っていただくまでに時間がかかる場合、鯉が酸欠にならないための準備が必要である。ゼミ生が観賞用で自宅に数尾引き取るようになったが、自宅まで自家用車で1時間程度かかるため、酸素についての対応が必要となった。今回は運良く直前に錦鯉の専門業者の方をお願いしてビニール袋に酸素ボンベで酸素を注入して錦鯉を梱包していただくことができた。そうした事前の段取りが必要である。

(執筆担当) 温 嘉楠

8. 今年度の活動の振り返り

8.1 新たな取り組みテーマ・コロナで出遅れた序盤

われわれ空き家班の今年度の活動全般を振り返り考察した結果をまとめる。

空き家班は今年度新たな取り組みにゼロから活動を始めた。昨年度までの活動経験を土台にして積み上げていくことが全くできなかった。さらに、ゼミ内で一番少ない7名での

活動でもあった。不安が多い中で手探りの活動スタートだった。

さらに新型コロナウイルス感染症による授業開始の遅れと前半のオンラインによる授業実施により、他のゼミ同様に序盤の活動が制限された。グループワークについては、4～5月はまったく満足のいく活動を行うことができなかった。他方で、リモートでのディスカッションでは全員が戸惑う中で建設的な話し合いが難しく、今まで当たり前に行ってきた対面での話し合いがどれだけ重要なものだったのかを再認識させられた。

そうした中、空き家活用のソフト事業の検討で、リモートでもゲームカフェ、保護動物の譲渡会場、レンタルスペース、アートアクアリウムなど様々な意見が出て、各企画をある程度詰めることができたのは有意義な進展だったと思う。

8.2 取り組みの推進～その1：空き家リノベーション

グループでのフィールドワークが部分的に解禁された6月下旬以降、空き家に足を運んでリノベーション工事のお手伝いをさせていただくことができた。リノベーション作業はゼミ生一同ほとんど経験がなく、緊張の面持ちで望んだ。地域おこし協力隊の加治聖哉様がひとつひとつ丁寧に指導してくださったので、気負わず楽しく作業に励むことができた。

この活動においては、各ゼミ生の授業の履修状況との兼ね合いから仕方ない部分もあったのだが、積極的に作業に参加するゼミ生とそうでないゼミ生との間で参加日数に大きく差が出てしまったことが反省点としてあげられる。

先述の通り7月31日にはリノベーション活動についてNSTの取材も受けることができた。またテレビだけでなく新聞等の複数のメディアに取り上げていただけた点にはありがたかった。

私たち独自の力での情報発信・PR活動は不十分であったところを、こうしてメディアが取り上げてくれた効果で後日のイベントにおける集客がカバーされたのではないだろうか。あらためて、メディアの強さを感じた。昨今若者はSNSを主な情報源としておりその影響力が注目される一方で、年配の方々にとっては新聞などのアナログなメディアの方が有効性が高いと考えられる。栃尾などの中山間地域では高齢化率が高いことから、来年度もアナログなメディアをより有効に活用できるように工夫すべきだと考える。

9月には空き家改修が完了してギャラリーが完成し、「白昼堂堂」と名付けられた。こけら落としとして、空き家改修のリーダーでもある地域おこし協力隊員加治様の作品のアート展示イベントが開催された。これは、私たちの今年度の活動の一つの区切りとなった。しかし、この段階でもう一つの活動の柱である自分たちが行うソフト事業の案はまだ固まっておらず、全体的な進行の遅さを感じた。

8.3 取り組みの推進～その2：ミニ・アクアリウムの開催

10月も半ばに入り、ギャラリーを活用した実施イベントとして、長岡の錦鯉を使用したミニ・アクアリウム開催を目指すことに最終決定した。しかし、われわれには錦鯉についての知識がなかったため、長岡市錦鯉養殖組合様にヒアリングにうかがった。

組合様からは多くのことを学ばせていただいたと同時に、自分たちの見通しの甘さを痛感した。企画の詰めも遅く、事前準備や下調べの甘さを改めて感じる機会になった。しか

し、最終的には錦鯉養殖組合様のご厚意により錦鯉を格安でお譲りいただき、何とか開催の運びとなった。

11月中旬から12月初旬にかけては、成果発表会の内容検討とアクアリウムの準備を平行して行った。白昼堂堂の会場設営においては、3年生小泉・永田の2名がデザインやレイアウトを考え、4年生を支えてリードするほどの活躍をしてくれたが、ここでもゼミ生の活動への参加度合いに大きく差が開いてしまうこととなった。

一方で、成果報告会での発表の準備にはほとんど時間を割けず、当日のリハーサルで初めて発表者全員が揃っての報告という状況になってしまった。

その成果発表においては、練習不足により各人のスピーチの仕方には課題が多かったものの、他のゼミでコロナウイルスの影響により思うような成果をあげることができなかったという報告が多かった中で、報告内容としては現在進行中のイベントを告知しLIVE感を演出することができたと思う。特に、白昼堂堂と中継した発表を実現できてインパクトを持たせることができたことから大いに達成感が得られた。

〔図表 39〕 成果発表の様子：ZOOMによる栃尾の同時中継



8.4 今年度の全般的な反省

今年度の反省点としては、以下の点があげられる。

一つ目は、ゼミ生ひとりひとりの仕事量の偏りだ。それはおそらくメンバー全員が感じた点である。個々人の予定、履修授業の時間割、自家用車の有無など様々な要因があり、仕方がない部分は確かにあった。しかし、チームで動いている以上は特定の誰かに責任や仕事が偏ることなく、メンバーが一体となって動く必要がある。少なくとも不公平感が生じないような活動は重要だ。来年度は、各人が今年度よりも自主的に動いて不公平感なくチームの目標達成に向かうようにすべきだと思う。

二つ目は、意思決定の遅さだ。コロナウイルスの影響で授業自体のスタートが遅れた。

さらには、慣れないリモートでの話し合いにより意思決定にかなりの時間を要してしまっ
た。来年度にコロナウイルスの影響がどの程度あるかわからないが、今年の実験を活かし
て、コロナ禍を言い訳にしないでスタートを早める対策・工夫をしたいと思う。

三つめは、話し合いの回数の少なさだ。今年度の活動を通じて、週一回の授業内での話
し合いだけでは時間がまったく足りないと感じた。この点は、アドバイザーの大竹様
に指摘いただいた点でもある。さらに、この問題は上記の意思決定の遅さの原因にもなっ
ていたと感じる。来年度の実験では、授業時間外にも積極的に話し合いの時間を設けるこ
とによって、今年度以上にスピーディにメンバー全員の意見をすり合わせていけたらと考
えた。

四つ目は活動内容のPR不足だ。今年度は、ミニ・アクアリウム開催のイベントが12月
月上旬にまでにずれ込んで、成果発表会の準備も全くできず、ギリギリの行程になってしま
った。そうしたことから、せっかくのミニ・アクアリウム開催に関して十分なPRができ
なかった。来場者からはイベントそのものについて高く評価していただけたが、いくら素晴
らしいイベントを開催したとしても、多くの人に来てもらえなければ、われわれの目標で
ある栃尾地域のPR効果は限られる。来年度以降は、余裕をもって適切なスケジューリン
グを検討することが必要である。

〔図表 40〕 栃尾タイムス新年号（2021/1/1）で掲載いただいた記事



幻想的な空間に酔いしれる来場者

長岡大学・石川英樹セ
ミの学生が、地域活性化
に向けた取り組みとして
「ミニアクアリウム」を
12月6日から9日まで開
催し、来場者を幻想的な
世界へ誘った。

同ゼミでは、栃尾地区
活性化に向けた取り組み
の一環として「空き家活
用班」が谷内2・よつて
け場（旧小林スポーツ）の
リフォーラムによる「レン
タルギャラリー」創設の
支援を実施。

9月の完成にあたり、
自分たちでもソフト事業
を開催できないかと話し
合い、同ゼミのアドバイ
ザーを務める大竹幸助さ
んの助言を受け、長岡市
錦鯉養殖組合やトチオノ
アカリの協力を得て開催
に至った。

イベントは会場の名称
「白昼堂」に因み「昼
想夜夢〜二十村郷（山古
志）の変わり鯉〜」と銘

谷内2・白昼堂で 長大生がミニアクアリウム

打って、約50匹の様々
な錦鯉と200個の木
枠ランプを多方向から
楽しめるよう配置。ゆ
つたりと癒しの時が過
ごせるようにと椅子や
畳も用意され、来場者
は様々な角度から錦鯉
とアカリが醸す異空間
を堪能していた。



8.5 次年度に向けて

来年度の取り組みについては、メンバー全体で十分議論することができなかったが、以下のような取り組み案を参考にして、次年度の検討につないでいきたい。

①アート・アクアリウム第二弾

今年度大変お世話になった長岡市錦鯉養殖組合様やご来場された方々の意見を参考にして、イベントを改善して実施する。開催期間の延長を検討するとともに、水族館やイベント会社との協働も含めて、一層大掛かりなものへスケールアップしてはどうだろうか。さらに、今年度実現できなかった錦鯉の市内小学校への譲渡に再挑戦して、錦鯉が市内の多くの場所で親しめる状況を実現していけたらと考える。

②あらたなソフト事業の展開

今年度の実現は見送られたが、企画化が進められた「ゲームカフェ」「動物譲渡会」などの事業内容を一層詰めて、実現にむけた検討を進めてはどうだろうか。

8.6 おわりに

今年度の私たちの活動は、当初コロナウイルスでフィールドワークが規制された中で、しかもわれわれ自身全く未経験の錦鯉を取り扱うプロジェクトへ挑戦し、マイナスからのスタートだったと言えるだろう。しかし、アドバイザーの大竹様や地域おこし協力隊の加治様、長岡市錦鯉養殖組合の上田様、トチオノアカリ協議会の方々を始め、地域から多大なご支援をいただき、何とか形にすることができた。12月の4日間のミニ・アクアリウムで栃尾の商店街に約150人を集客できたことはまずまずの成果といってもいいだろう。

とはいえ、今年度の活動では栃尾地域活性化の基盤づくりを開始したに過ぎない。来年度以降もアドバイザー大竹様をはじめとする地域の方々のご指導の下、活動を継続していきたい。また、この私たちの活動を前例として、全国の中山間地域でも同じような活動を行う方が増えることを願っている。

(執筆担当) 竹内寛織

〔参考文献〕

- (1) 厚生労働省 ホームページ「食品衛生管理者」(URL <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000049348.htm>) (2021年1月5日閲覧)
- (2) 長岡市地域振興戦略部 地域振興戦略担当課長「アートを通じた地域活性化を促進 空き家を活用したギャラリーがオープンします」(URL <https://www.city.nagaoka.niigata.jp/shisei/cate02/houdou-shiryuu/file2020/20200911-02.pdf>) (2021年1月5日閲覧)
- (3) 日本政策投資銀行「新潟県内錦鯉産業の強み」(URL https://www.dbj.jp/topics/region/area/files/0000030815_file2.pdf) (2020/12/26 確認)
- (4) トチオノアカリ・ウェブサイト (URL <https://tochionoakari.com/>) (2021年1月5日閲覧)
- (5) 栃尾タイムス・Facebook (URL <https://ja-jp.facebook.com/pages/category/Media/栃尾タイムス-992975654110073/>) (2021年1月5日閲覧)

長岡大学 学生による地域活性化プログラム 各プロジェクト報告書

1. 長岡市撰田屋の魅力を高め、観光客を増やし、地域活性化を図る。
～現状の把握と分析～
生島義英ゼミナール
2. 栃尾地域の PR による活性化：
空き家の再活用による地域振興活動と二十村郷の錦鯉の PR 活動
石川英樹ゼミナール
3. 栃尾地域の PR による活性化：
栃尾繊維業の PR に向けたマスク考案と裂き織りによる商品開発
石川英樹ゼミナール
4. 栃尾地域の PR による活性化：
フォトコンテスト開催による栃尾地区の PR
石川英樹ゼミナール
5. まちの情報発信拠点「まちの駅」の認知度アップに向けて
鯉江康正ゼミナール
6. 十分杯で長岡を盛り上げよう！
－動画で伝えたい 十分杯と長岡の魅力！－
権 五景ゼミナール
7. データエビデンスに基づいた地域をより良くするための提言
～地場産業・観光を中心に～
坂井一貴ゼミナール
8. オープンファクトリーで長岡を活性化！
栗井英大ゼミナール
9. グラスルーツグローバリゼーション
－草の根・地域からの人類一体化の推進－
広田秀樹ゼミナール
10. 商品開発から学ぶ会計と経営
～伝統文化と現代技術の結晶「みどり繭」を巡って～
喬 雪氷ゼミナール

令和2年度 学生による地域活性化プログラム 石川英樹ゼミナール活動報告書

【発行日】 令和3年3月30日

【発行人】 村山 光博

【発行】 長岡大学

〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8

T E L 0258-39-1600 (代)

F A X 0258-33-8792

<https://www.nagaokauniv.ac.jp/>